

〔この一言〕

ウェルビーイング (Well-being) 松山清美 2

〔提言〕

深い学びにつながる「個別最適な学び」と「協働的な学び」
..... 武田雅子 4

〈特集〉

未来に生きることばの力 — 「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を通して—

〔インタビュー〕 伊藤潤 8
「これからの国語科教育が目指すもの」
石元恵未
伊藤大和

「個別最適な学び」と「協働的な学び」を追究して ... 今村淳司 16
～ナゴヤ・スクール・イノベーション実践者報告～

〔名古屋国語教育研究会 オンライン講演会より〕
「子どもたちの学びをつくる国語科の授業」..... 中村和弘 22
～「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現に向けて～

〔実践を語る〕

- 1 話すこと・聞くこと部会
協働的な学びを通して聞き方を考えることができる児童の育成 (小六)
..... 大澤佳枝 24
- 2 書くこと部会
「見通しをもつ」ことに重点を置いた書くことの授業づくり (小三)
..... 舟橋宏紀 30
- 3 小学校読むこと部会
「雪わたり」の魅力を伝えよう—読みの観点を活用して、自ら読み進める学びを目指して— (小五)
..... 館純子 36
- 4 中学校読むこと部会
全体課題と個別課題を設定する学習活動を取り入れた説明的文章の実践 (中三)
..... 大塚将弘 42
- 5 言語部会
言葉そのものの特徴に気付き、その言葉の活用について共有することで、
よりよい言語感覚を身に付けた子どもの育成 (小一・中一) ... 横井麻乃 48
長谷川恭平
- 6 書写部会
行書の特徴を理解して効果的に文字を書くことができる生徒の育成 (中三)
..... 小川拓海 52

〔全国大会見てある記〕 垣見里紗・松岡篤司 58

〔この一冊〕 都築潤矢・後藤佑介 60

〔教室Q & A〕 62

〔編集後記〕 64

名古屋国語教育研究会のあゆみ 70

(題字 河合良昌)

ウェルビーイング (Well-being)

松山 清美

(名古屋市立栄小学校)

近年、「ウェルビーイング (Well-being)」という言葉が耳にすることが多くなりました。

「令和の日本型学校教育」の構築を目指して、全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現」と題して、中央教育審議会答申が令和三年一月に出されたことは周知の通りですが、その中にも、「ウェルビーイング」という用語が次のように用いられています。

経済協力開発機構 (OECD) では子供たちが二〇三〇年以降も活躍するために必要な資質・能力について検討を行い、令和元年五月に「Learning Compass 2030」を発表しているが、この中で子供たちがウェルビーイング (Well-being) を実現していくために自ら主体的に目標を設定し、振り返りながら、責任ある行動がとれる力を身に付けることの重要性が指摘されている。

また、「ウェルビーイング」の語には注釈が付いていて、そこには、次のように記載されています。

OECDは「PISA2015年調査国際結果報告書」において、ウェルビーイング (Well-being) を「生徒が幸福で充実した人生を送る

ために必要な、心理的、認知的、社会的、身体的な働き (functioning) と潜在能力 (capabilities) である」と定義している。

つまり、「ウェルビーイング」は、身体的・精神的・社会的に良好な状態にあることを意味する概念で、「幸福」と翻訳されることも多い言葉です。

さて、二〇二〇年九月、コロナ禍で不安が続く中、ユニセフ・イノチェンティ研究所が、「レポートカード16―子どもたちに影響する世界・先進国の子どもの幸福度を形作るものは何か」を発表しました。報告書では、日本を含む先進国三十八か国の子どもの、幸福度ランキングが示されました。ユニセフ研究所は、幸福度ランキングを、①精神的幸福度、②身体的幸福度、③スキル(学力・社会的スキル)の三観点から割り出しています。その結果、日本は、総合ランキングが二十位で、観点ごとのランキングは、以下の通りでした。

- ① 精神的幸福度 三十七位
- ② 身体的幸福度 一位
- ③ スキル(学力・社会的スキル) 二十七位

この結果を見て、みなさんは、どのように感じられるでしょうか。「②身体的幸福度」が一位でありながら、「①精神的幸福度」は、三十八か国



中の三十七位、つまりワースト二位です。また、「③スキル」の内訳をみると、二つの指標（学力・社会的スキル）の順位は両極端でした。すなわち、「学力」の指標である、数学・読解力で基礎的習熟度に達している子どもの割合は、日本は上位五か国に入りますが、「社会的スキル」は、下から二番目でした。中でも、「すぐに友達ができる」と答えた子どもの割合は、日本はチリに次いで二番目に低く、三十パーセント以上の子どもが、そうは思っていないという結果だったので。

このような「精神的幸福度」や「社会的スキル」が乏しい我が国の結果を見ると、冒頭で紹介した『令和の日本型学校教育』の答申に書かれている一節「子供たちがウェルビーイング (Well-being) を実現していくために自ら主体的に目標を設定し、振り返りながら、責任ある行動がとれる力に身に付けること」がもつ意味は、非常に大きいと言えます。すなわち、答申に掲げられている「個別最適な学び」と『協働的な学び』の一体的な充実の実現に向け、あらゆる教育場面で子ども主体の学びが展開されるよう、環境を整え、サポートしていく必要があります。

本市教育委員会の施策「ナゴヤ スクール イノベーション」のホームページに、本市アドバイザーである熊本大学大学院准教授・苦野一徳氏の以下のようなコメントが掲載されています。

これまでの百五十年間、日本の学校教育は、「みんなと同じことを、同じペースで、同質性の高い学年学級制の中で、できあいの問いと答えを勉強する」システムとして続いてきました。落ちこぼれや不登校を始めとする、様々な問題の最大の理由はこのシステムにあります。…（中略）…

転換の一つの軸は、私なりに言えば「学びの個別化・協同化・プロジェクト化の融合」です。子供たちが、自分のペースで、自分に合った学び方で、「ゆるやかな協同性」に支えられながら学び合う。カリキュラムの中核は、自分たちなりの深い問いを探究する、様々なワクワクできるプロジェクトです。

こういった自己実現につながる主体的な学びや、他者と協働する学びを通してこそ、子どもたちの「ウェルビーイング」が高まると考えます。名古屋国語教育研究会会員の一人一人が、国語科学習の切り口から、このような学びを実践するフロントランナーとなることを期待しています。そして、そういった学びの基盤となることばの力を育てることは、これからの時代においても重要課題です。「未来を創ることばの力」を育む子どもたちが、「ウェルビーイング」を実現していく。…そのような姿であふれることを願っています。